

月例研究会（2007年4月25日）

社会調査とオーラル・ヒストリー

江頭 説子

本報告の目的

本研究の目的は、歴史学の領域において方法論として一定の市民権を得るまでに至っているオーラル・ヒストリーと、社会学の領域において市民権を得つつあるライフ・ヒストリーの関連性について検討することにある。研究会では、まずオーラル・ヒストリーの歴史について国際比較の視点から検討し、日本におけるオーラル・ヒストリーの歴史をふりかえり、その発展の特徴をあきらかにしたうえで、オーラル・ヒストリーの現状と課題について報告した。つぎに、ライフ・ヒストリーの流れを整理したうえで、オーラル・ヒストリーとライフ・ヒストリーの関連性についての報告をおこなった。

報告内容

オーラル・ヒストリーは、政治史、労働史、地域史などのように、歴史自体にフィールドワークの伝統が残っているところ、また学際的な交流がなされたところで発展してきた。日本では特に政治史の領域において発展し、政治学においてはオーラル・ヒストリーとは「公人の、専門家による、万人のための口述記録」（御厨）であると考えられていた。このように対象を限定することは、伝統的な政治史が文書資料を重視する方法論に対して、口述が重要な資料とな

ることを立証するために、必要な立場であった。しかし御厨自身が述べているように「この十年で急速に『オーラル・ヒストリー』が市民権を得たことを考えると、公的体験を有する人のみならず、いわゆる庶民や名もなき人にまで、改めて対象とする人々の背景を広げてよい」と考えられる。対象を「公人」から「市井の人々」に広げると、社会学の領域において蓄積のあるライフ・ヒストリーとの関係が近づいてくる。そもそも、オーラル・ヒストリーもライフ・ヒストリーも、その出自は1920年代の都市社会学におけるシカゴ学派のライフストーリーの方法論に関心をもち、発展させたという共通点がある。ライフ・ヒストリーの歴史に目を向けると、1940年代後半以降、社会学の領域においては、統計調査を主とする量的研究や構造機能主義がより科学的な理論として主流の位置を占めるようになり、質的研究のひとつであるライフストーリー・インタビュー法によるライフ・ヒストリーは批判を受け、周辺領域に位置するようになった。しかし、1950年代の終わりに、量的研究に対して質的研究に基礎をおく最初の反発の声をきっかけとして、ヨーロッパを中心にライフ・ヒストリー法リバイバルの動きが起き始めた。その後のライフ・ヒストリーは、大きく分けて実証主義、解釈的客観主義、対話的構築主義の3つのアプローチ法、調査者と被調査者の関係の捉え方による立場の違い等、複雑な形で発展してきている。オーラル・ヒストリーとライフ・ヒストリーの関連性については、論文の形で後日発表する予定である。

（えとう・せつこ 法政大学大原社会問題研究所兼任
研究員）